

登山中クマに襲われなかったために



そのためにはクマを知ることだ

小池伸介（東京農工大学大学院・グローバルイノベーション研究院教授日本クマネットワーク代表）

冬号 PART1 では、「クマに何が起きているのか、そして、クマはどのような動物なのか？」を小池伸介（東京農工大学院・教授）の記事を紹介した。クマの出没件数や人的被害のほとんどは森林や河川敷などのクマの生息地が多かったが、私たちの生活圏である市街地や人家周辺、公園などに現れたのが7割

に上っている。一方、昨年1年間で登山中にクマの被害に遭った事例は新聞では数えるほどである。PART II では、2025年に登山中にクマに襲われた事件を紹介するとともに、遭遇したらどうするかも大切だが、クマに会わないための方法が重要である。不幸にもクマに遭ったらどうするかを紹介する。

2025年登山中のクマ被害

特に大きく報じられたのは、北海道・知床での死亡事故です。8月14日、羅臼岳の登山道を下山中だった20代の男性がヒグマに襲われた。一緒にいた友人がクマ撃退スプレーを使用した。男性は林の中に引きずり込まれ、翌15日に遺体で発見された痛ましい事故でした。

同じ8月に富山・折立から登った太郎平キャンプ場（薬師岳付近）で、テントがクマに襲われ、中の荷物ごと持ち去られる事案が発生した。幸い負傷者は出なかったが、登山者の食料を狙う行動が問題視された。

最近では今月に岩手県・宮古市内の雪山登山中に男性が雪の穴に落ちた際、その中で冬眠していたクマに足を噛まれるという珍しい事故が発生した。

特徴として3つあげられる。羅臼岳の事故のように母グマの凶暴化だ。子連れのみグマ

が防衛本能から非常に攻撃的になるケースが目立つ。2つ目は学習能力を高めたクマの増加である。人間のザックやテントに「食料がある」と学習したクマが、登山者に執拗に付きまとう事例だ。

そして東北地方のクマは 稲を食べるようになってきて、米に対する執着心が非常に強く危険である。3つ目は生息域の拡大である。以前はクマが出なかった低山や市街地に近いハイキングコースでも遭遇・被害が多発していることだ。里山型のクマは人をよく観察していて、人を恐れなくなっている。

クマに関する基礎知識

2025年の教訓として、「クマ鈴を鳴らしていても、風下や沢浴いではクマに音が届かない」ことや「逃げるものを追う習性」が改めて強調されている。私たち登山者はクマ対策の正しい

知識を持つことが大切である。クマに関する基礎知識を共有したい。

①クマに嗅覚は犬の3倍である

クマの嗅覚は犬の3倍です。餌を取るため山の高いところ、稜線を歩く。また木々の鬱蒼としたところよりも臭いを取るために明るく開けたところを好む。

②「朝夕」はクマの活動のゴールデンタイム

・クマは朝方と夕方によく見かける。薄明薄暮性（はくめいはくぼせい）」という習性をもっている。大体朝10時から16時頃はクマと出会う確率は低い。クマは体温調節がうまくできない動物なので、日中の直射日光や暑さを避ける傾向がある。そのために涼しい朝夕は、エネルギー消費を抑えて効率よく移動・採食ができる時間帯である。また、天候が曇りや雨の日、霧が深い日は、日中も暗いためクマの捕食時間が延びることがある。

③クマの視力は良くない。

良くないが薄暗い時間帯でも動くものを察知する能力に長けている。視認性のバランスが良い動物である。

④クマは人間を怖がる動物

クマは本来、人間を避ける動物である。人間が活発に動く日中を避け、その前後の時間帯に活動を移動させているので、一人での山歩き、クマの活動ゴールデンタイムは避けるべき。

⑤クマは冬眠前が餌漁り・食欲旺盛。

8月中旬～冬眠するまでが食欲旺盛になり食料への執着が高まり、特に10月中旬～12月中旬までが餌とりの執着が強く極めて危険である。

⑥広葉樹と針葉樹での生息地

クマのエサはドングリ、ブナの実などの餌ある落葉樹帯を動き回っている。基本的には杉、檜、松などの針葉樹林帯では見かけないので、

危険を察知する意味で植生を知ることである。PART1で述べたようにクマは「雑食性の動物」「森の掃除屋」なので何でも食べている。

⑦クマの危険なサイン

子グマを木に押し上げている母グマは非常に危険である。また首を上下に振るのは威嚇している証拠、危険である。特にぬいぐるみのようにペタンと座った姿勢は非常に危険なサインである。すぐ逃げろ！クマはこの状態から襲いかかってくる。

⑧クマの「戻り足」

足跡を追跡していると突然足跡が消え、どこへ行ったのかわからない時がある。クマは追跡をかわすため、進んだ歩幅と同じ歩幅でもと来た道に戻る習性がある。

クマに会わないための「予防行動」

一番はクマに出会わないことである。クマは本来、人間を避ける動物です。こちらの存在を早く知らせ、クマが逃げる時間を作ってあげることが重要である。

①音で存在を知らせる（時間と場所で使い分ける）

熊鈴・ラジオ：常に鳴らし続けるのが基本ですが、風が強い日や沢沿い（水音が大きい場所）では音が消されるため、ホイッスルを吹いたり、大きな声を出したりして意識的に強い音を立ててください。鳴らしっぱなしのラジオも人がいることを知らせるのに効果があるが、逆にクマの発する警戒音が気付きにくい。

②見通しの悪い場所：カーブの先や藪（やぶ）が濃い場所では、手を叩くなどして事前にこちらの存在を伝えます。

③口笛、歌声はどれも効果がある。また、ドンドンと足や杖で地面に伝わる振動も有効である。爆竹も紹介されているが、遠くにいる場合

は効果あるが、近場では逆にクマが驚いてその場に立てこもったり、こちらに向かってくる場合がある。

④グループで歩いているときは仲間同士の話声もあるので、クマに襲われた事例は聞かない。だから生息地に入っていくときは一人では山歩きをしないことだ。

逆にクマの発する警告音に注意してほしい。バンバンと激しく地面をたたく音や特有のうなり声はクマの警告音だ。この場合クマはすぐには襲ってこないなので速やかに逃げよう。「おーえ、おーえ」と叫ぶような声は母グマが子グマを呼ぶ声なので、近くに母グマがいるということを知って警戒して欲しい。

クマ情報の収集

山に入る場合は、事前にクマ情報を入手する事。例えば、私の地元日光山域にハイキングするとしましょう。日光山域のように広大なエリアに入る場合、情報の鮮度と専門性によって「行政窓口」と「現地ビジターセンター」の2箇所を使い分けるのが最も効果的である。日光警察署も情報を持っているが、登山者が事前に情報を収集する場所としては、以下の窓口が詳細な「山の状況」を把握している。

1. 日光山域の場合、どこに確認すべきか。一つは行政窓口として、日光市 環境森林課 自然環境係だ。環境森林課の役割は、市内全域（人里に近い場所から山間部まで）の目撃情報を集約している。2つ目は日光湯元ビジターセンターまたは日光自然博物館赤沼自然情報センター（低公害バス発着所）だ。登山者にとって最も重要な窓口で、ハイカーからのリアルタイムな目撃情報を地図にまとめて掲示している。特定の登山道（例：戦場ヶ原、白根山、男体山周辺）の危険度を詳しく教えてくれる。

2. 栃木県警察「ルリちゃん安全メール」の利用もある。警察は主に「住宅街に出た」などの緊急性の高い情報を発信している。登山の数日前から「ルリちゃん安全メール」登録しておくと、近隣の出没状況がスマホに届くので便利だ。

山に入る事前活動として以下のルーチンを推奨する。

3日前：自治体（日光市など）のHPで「クマ出没マップ」を確認。

当日朝：登山口にあるビジターセンターや掲示板をチェック。職員がいれば「最近、このルートで目撃はありますか？」と直接聞くのが一番確実です。

歩行中：新しいフンや足跡、木の幹の爪痕がないか、足元と周囲を常に観察します。

クマ対策は「これさえあれば完璧」というものではなく、**「音出し」「情報収集」「スプレアの携行」**をセットで行うことが大切です。特に日光周辺は観光客も多く、クマが人間に慣れている場合もあるため、常に周囲の気配（ガサガサという音や、動物の臭い）に敏感でいてくださいね。

